

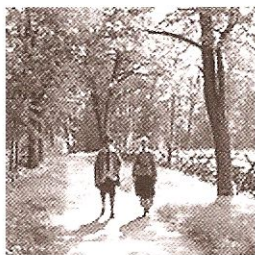
バトル・グリーン

第一回

渡辺 由佳里



序章・わがホームタウン



今年は例年のない暖冬だったが、それでもマサチューセッツ州の冬は厳しい。ドライブウェイの雪かきをするたび、「なぜこんな場所に住み着いてしまったのだろう？」とため息が出る。私の生まれ故郷は降雪量の多い兵庫県北部で、冬の半ばには雪かきをしてもその雪を積み上げる場所がなくなってしまう。重いショベルにすぐ張りつく雪をこそぎ落としては、「大きくなったら絶対に暖かい場所に住む」と誓ったものである。なのに、故郷よりも寒いマサチューセッツ州に住みついてしまったというのは皮肉なものだ。

その故郷に昨年帰省したとき、私はこれまであまり気にもかけなかった風景の美しさに心を奪われた。朝露で銀色に輝く田畑や朝靄がかかった山々、木造家屋と柿の木……。すべてが息をのむほど美しいのである。私はまるで旅行者のように何度も立ち止まっては、風景を心に刻みこんだ。

今回の帰省ではもうひとつの発見があった。10日ぶりにレキシントン町のバトルグリーンを目にしたとき、旅の緊張感がすっかり消えたのである。そして次の瞬間にはいつものように商店が減って銀行が増えたことを案じ始め、レストランに活気があることに安堵し、美しく保存されている歴史的建築物に誇らしさを覚えていた。いつの間にか、私にとっては生まれ故郷が「異国」で、レキシントン町が「ホームタウン」になっていたようである。



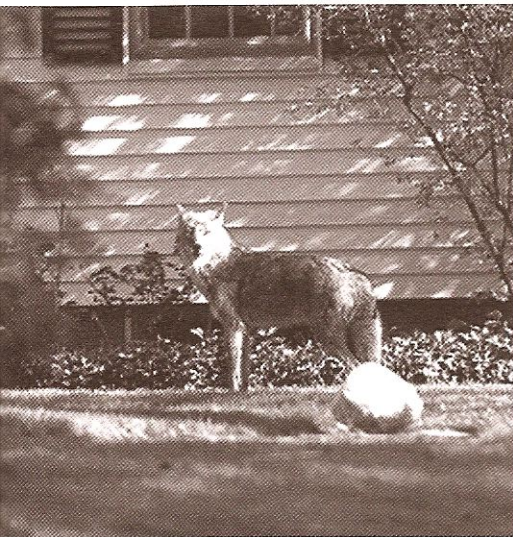
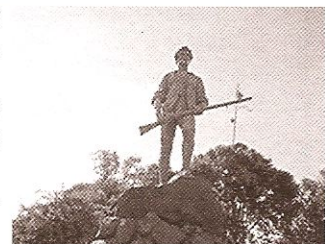
私にとってこれは新鮮な発見だった。生まれ故郷を離れた後、京都、東京、ロンドン、香港……とさまざまな場所で暮らしたことがある私だが、一度として住んでいる地域を「わがホームタウン」と感じたことはなかったのである。何年暮らしても昔からの住民にはよそ者扱いされるし、私自身もよそ者であるほうが気楽だった。田舎で育った私には、「地域の一員になる」というのは、冠婚葬祭での料理の支度、祭りの当番、公共の場の掃除……と面倒な義務のイメージしかない。だから、どこに住んでもずっと「お客さん」でいたいというのが本音であった。

そういう無責任な私の態度が、レキシントン町に引っ越した日から劇的に変化したわけではない。どちらかというと、これまでの人生で最も孤独を感じたのがこの時期だった。どの国でも「お客さん」のままですぐ友人ができた私なのに、ポストン近郊のレキシントン町ではそう簡単にはいかなかった。ニューイングランド人特有の内向的な態度が、私にはロンドンや香港で出会った国際色豊かな人々に比べると好奇心に欠け、心を許さず、退屈で付き合いにくいように感じた。過去のオープンでファンキーな友情が恋しくて、レキシントン町を「わが町」と感じる日なんて永遠に来ないと信じていた。



そんな私が、10年後には町の警部補と顔見知りになり、複数の教育委員から選挙の推薦を頼まれ、行政委員に行政の改革案を提案し、あれほど恐れていた「当番」役を楽しむようになったのだから人生というものはわからない。そのきっかけも受動的なものだった。「不思議の国のアリス」のアリスのように何も考えずに好奇心でウサギを追いかけているうちに、町で起こっている出来事に次々と巻き込まれ、傍観者の立場から物語の一部に引きずり込まれたのである。もちろんそれらの出来事の大部分は楽しいものではない。学校vs両親、旧住民vs新住民、住民税オーバーライド賛成派vs反対派……といった具合に、住民をまっぴらに分ける問題が殆どだ。中には、全米で話題になった事件もある。私が一番驚いたのは、何かが起こると住民ボランティアたちが即座に集まり、問題解決のために格闘するということだった。スーパーヒーローたちの素顔も、教会の牧師、引退した校長、元NASAのエンジニア、主婦、高校生……と色とりどりである。

「退屈で付き合いにくい」というのは私の大きな誤解で、彼らはニューイングランド流にとても「オープンでファンキー」だったのだ。次号からは、「わがホームタウン」で私が遭遇した出来事を、内部からご報告しようと思う。



わたなべ ゆかり・一九六〇年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。二〇〇一年、『アーティファクト』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。二〇〇三年、『二作目』神たちの誤算』を発表。現在はポストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。